

平成28年9月／29年4月入学

## 慶應義塾大学大学院入学試験問題

法務研究科

# 小論文試験

- 注 意
1. 指示があるまで開かないこと。
  2. この冊子は、問題用紙・メモ用紙を含めて12頁ある。試験開始後ただちに落丁、乱丁等の有無を確認し、異常がある場合にはただちに監督者に申し出ること。12頁はメモ用紙である。
  3. 受験番号（2箇所）と氏名は、解答用紙（表）上のそれぞれ指定された箇所に必ず記入すること。
  4. 解答用紙の※を記した空欄内には何も書いてはいけない。
  5. 答えは横書きとし、解答用紙（表）の左上から、小問ごとに順次、1マスに1字ずつ書き進めること。
  6. 答えは、黒インクの万年筆またはボールペンで書くこと。下書きの必要があれば、メモ用紙を利用し、解答用紙を下書きに用いてはならない。
  7. 注意に従わずに書かれた答え、乱雑に書かれた答え、解答者の特定が可能な答えはこれを無効とすることがある。

## 【問題】

〔文章Ⅰ〕および〔文章Ⅱ〕は、同じ著者による二つのエッセイの一部である。以下の文章を読んで、それにつづく【問Ⅰ】および【問Ⅱ】に答えなさい。

### 〔文章Ⅰ〕

日本の青少年の自殺死亡率の高さは、苦渋に満ちた受験制度に起因しているとかつて論じられたことがある。事実、1950年代、60年代の国連の『人口統計年鑑』では、15～24歳層の自殺死亡率は、大陸ヨーロッパのいくつかの国々と比較しても際立って高い数字を示していた。何をもって「自殺」とするかは事実の判断と難しい定義上の問題を含むが、米国の社会学者であり近代日本の教育に関するすぐれた著作をものしたH・パッシン氏も、『日本近代化と教育』の中で同様の推論を行っている。しかしその後の数字の動きは必ずしもこの推論を支持していない。むしろ日本では、40代後半から50代前半の男性、あるいは高齢者の自殺死亡率が上昇し、受験競争が広く激しく社会に浸透したといわれるにもかかわらず、青少年の自殺死亡率はその後低下傾向を示したのである。

「試験地獄」とか「四当五落」という言葉は、戦前の旧制高校入試の頃からすでにメディアで用いられていた。厳しい苦しそうな競争を見ると、そこからまず社会制度上の悪を読み取ろうとする者が多いことは昔も今も変わりはない。メディアは「悲劇が世の常だ」と見、文学はそれをストーリーの形に結晶化するのである。久米正雄の『受験生の手記』もそのひとつであろう。主人公は旧制一高の受験に失敗して、現役の弟とともに再挑戦する。ところが弟は合格したのに、自分は再び失敗、恋愛にも破れ最後に自殺をするという話である。この作品が書かれたのは1918（大正7）年2月ということだから、日本最初の政党内閣であった原敬内閣が、大学令、改正高等学校令を公布すると同時に「高等諸学校創設及拡張計画」を策定し、高等教育機関の大規模拡充政策を展開しはじめた年である。第一次世界大戦末期の好況を背景とし、増え続ける進学希望者と産業界からの人材需要に対処するための高等教育拡充策がこの年に打ち出されたのである。

「狭き門」へ押し寄せる多くの進学希望者を、いかに選抜し配分するかという問題は、

20世紀に入ってから欧米はじめ多くの国々が直面し、悩まされてきた難問であった。近年、日本の「センター試験」が大学の序列を鮮明にし、いわゆる「輪切り現象」を促進させたと批判されるが、これも日本に固有の問題ではない。米国で大学入学の選抜の目安として用いられるSAT(学力適性試験)も、同様な「輪切り」の強力な指標として用いられている。そしてヨーロッパも程度の差こそあれ事情は同じである。いわゆる教育の機会均等が保証されている民主主義国では、第二次世界大戦後とくに、加熱した進学競争の「ゆがみ」に苦しみはじめたのである。

大学入試をめぐる近年の変化を振り返ると、「入試地獄」という言葉が一昔前ほど多用されなくなったことに気づく。久米正雄の『受験生の手記』にあるような、「この大学に入らなければ人生に意味を与えることができない」といった悲愴感が弱まり、入試方法も多様になった。こうした変化は、大学を卒業した後の生活が結局どうなるかということについて、若者がかなり現実的な判断をするようになったことにある。有名な大学に苦勞して入って立身出世を望んでも、所詮「厚化粧」ははげ落ち、むしろ劣等感に苛まれるだけという危険を知るようになったのである。それよりも、自分の力や資質にあった大学で、適量の努力をすれば入れるかもしれないところを選ぶ、という現実的な計算と努力で自分の将来を決める若者が以前より増えたということだろう。採用する企業側も、無理な苦勞をして知的エネルギーを消耗してしまった者よりも、trainabilityのある(成長しうる)若者をどう選別するかという視点を重視しだした。定形的なものを吸収する能力だけではなく、ノン・ルーチンな事柄の判断力を持つ者こそ、人材として必要だということを強調しはじめたのである。

民主制社会では、知識と才能は、最高の資本としての働きをもつ。門閥や財産といったすべての特権がなくなり、あらゆる職業がすべての人々に開放され、自力で、どんな職業の最高の地位にも到達できるチャンスが与えられる。そのような社会で、このチャンスをつかめば安楽な生涯が自分の前に開かれていると本能的に感じとるのは、当然の野心であろう。しかし平等社会が生み出すこの野心や本能と、この本能を満たすべき手段との間には永遠の対立がある。「直接神からやってくる知性の不平等が、なお後に残る」(トクヴィル)からである。

われわれ産業社会に生きる人間は、たんなる「勤勉さ」だけではなく、知識と才能が富の獲得手段としてきわめて有効であることを知っている。そして知識を獲得し才能を伸ばすためには、学校教育が重要な役割を持つと信じている。機会の平等の拡大した産業社会も、つねに人材を評価し選別することを必要としているからだ。その結果、学校教育への金銭的支出は一種の投資行為となり、不確かな将来の収益を期待しながら、ますます多くの高等教育への支出がなされるようになってきたのである。その結果何が起こったか。ひとつには、回収時期が早く来るような確実な教育投資を選択する傾向が強まったということだろう。逆に投資期間が長く、収益の不確かな学問分野は一般に敬遠され、知識が宣伝や広告によって需給の法則どおりに売買されるようになった。

と同時に、直接すぐには役に立たなさそうに見える「古典」の教養も、次第に軽視されるようになった。本来「教養」は西洋古典や漢学といった「古典」（人類の知的遺産）の知識を意味したが、こうした教養への関心は薄れ、次第に「雑学」程度の意味しかもたなくなつた。研究する者も、大学という位階秩序の中で、細かなテーマでいくつもの論文を書き、いかに早い時期によい職を得るかの競争に専念するようになった。その結果、大学で教養教育を担当できるよき指導者を育てることがほとんど不可能になってしまったのである。これを大学における教養教育の「死」と言えば言い過ぎだろうか。

教養の衰退が現代社会に与える影響は意外に大きい。それはマニュアルにはない、非定形的判断のできる人材を育てるための重要な手段のひとつを失ったということである。時間という厳しい審判者の裁定をくぐり抜けてきた古典がわれわれに教えてくれるのは、人間と社会についてのマニュアル化することのできない深い洞察であろう。この洞察がいざという時の非定形の判断能力を高めてくれるとすれば、古典教養を失うことは、そうした判断力をも失うということの意味する。

とくに日本で古典教養軽視の傾向が強まったことにはそれなりの事情がある。日本は明治以降、欧米の高等教育のスタイルを移植することに余念がなかった。しかしそれは西洋古典と切り離された形での西洋の移植であり、同時に日本にとっての古典教養の重要部分を占めてきた漢学や日本古典を切り捨てるという形で進められた。この古典教養の放棄という点にこそ、現代の教育の病、日本の教育の欠陥が存在するのではなからうか。教育と

研究が切り刻まれ、マニュアル化された知識と、野蛮なまでに専門化された研究関心とに支配されるようになったことがその現れである。

こうした大きな代償を払うことによって得たものももちろんある。日本の場合、実際的な知識と技術を産業の場で生かせるだけの人材を育てることができた。そして実力主義が徹底し、広い競争機会が与えられ、有能な人材を選抜するためのかなり正確で公正なシステムを作り上げることができた。これが日本を豊かで平等な社会に変えたことは疑いない。

ところが難関大学に入った者の中にも、定型的な知識は持っているが、日常的でないものにぶつかった時、即座に応用がきくような力を持ち合わせない、つまり教養のない人間が多いことをわれわれは次第に実感するようになった。つまり教育があるということと、実践知や教養があるということは違うという事実を、とくに戦後われわれは知ったのである。

## 〔文章Ⅱ〕

……戦後日本における古典教養の衰退と「理論」信仰の隆盛について述べた。この傾向は、われわれの知的活動をどのように制約したのか、あるいはどのような限定された知的活動からこの傾向は生じたのか。おそらく単純化していえば、この問いに対する答えの鍵は知性と論理力の違いにあるように思う。元来「知性 (intellectus)」は、intellegere という動詞から派生した言葉であり、その元来の意味は「間を読む」というようなものだとかトリックの司祭から聞いたことがある。Oxford の語源辞典を見ると、たしかに intelligent は、inter と legere が結合したもので、「中から選ぶ」とか「ピックアップする」といった意味を語源的に持つと記されている。つまり、知性とは元来、受け身で知識を得ることではなく、知識なり記号化された情報の間から、何かを積極的に「くみ取る力」を意味したのである。この働きは「深読みする」という言葉にも置き換えうるが、英語でも「行間の意をくみ取る」という表現として、read between the lines (行間を読む) という言い方があるのは面白い。

言語学の専門家でもない筆者が、語源にまで遡って知性の特徴を論じたくなったことにはわけがある。その第一は、ややもすれば混同されがちな知性と理性を区別するためであ

る。人の知的な力を評して、「あの人は頭がよい」と言うことが多い。しかしこの言葉はきわめて曖昧である。人の頭のよさには、さまざまなタイプのものがあるからだ。回転の速い頭脳、回転は遅いが深く掘り下げるエネルギーッシュな頭脳、常識や通説を疑う能力、抜群の記憶力、直感力の鋭さなど、まさに多種多様である。

しかし、ここで注意しなければならないのは、三段論法のような論理力は、頭の働きのなかで、知性の力とはみなされないということだ。哲学者の大森荘蔵氏によれば、「論理的に正しい」ということは、記号論理学の規則に従って始めに言ったことを言い直し、言い換えることであるから、始めに言ったこと以上の情報を与えていないことになるという。したがって論理的であることは、冗長であることを意味する。もちろん数理的な論証力と知性は無縁ではなく、相互に関連を持つことが多いが、精神の働きとしては別物だ。論理的に証明する能力は、「理性」(ratio)と呼ぶのがふさわしい。理性は高次の認識能力を指すが、感覚はもとより、知性ともはっきり区別される。スコラ哲学でラチオ (ratio) と呼ばれる理性は、比較し、推理し、証明することによって対象に働きかける力だという。それに対して、「神の直観を含む最高の認識能力」がスコラ哲学のいう知性なのである。したがって精神の働きとしては、知性は理性より高位に置かれるのが、西欧の近代以前の伝統であった。

しかし、近代以降、一般の人々はこの知性（深読みする力）と理性（論証する力）のうち、後者、すなわち理性に圧倒的な価値を置いてきた。言葉を換えれば、論証し、実証することこそ重要だと主張してきたのである。その結果、数理的能力、論証する力（具体的には幾何学などを）こそが「頭のよさ」の証拠であるかのように語られるようになった。

たしかに、学校の入学試験などでは「学力」の判別力として高い効果があるのは、一般に数学と語学だといわれる。他の科目で差が大きく開くことはないが、数学と語学こそが合否を分けるというケースが多い。しかし、学校（とくに高校や大学）で学ぶ数学は、論理力や推理力を必要とするが、その数学がよくできることと、先に述べた「知性」とは完全な対応関係にはない。

しかし、誤解を避けるために一言つけ加えておくと、もちろん立派な数学者には「知的な人」は多い。学生が数学を理解し習得することと、数学者が数学のフロンティアを開拓

していくことは、能力としては別の力を必要とするからであろう。実はこの違いは大きい。既存の数学上の概念を用い、命題を証明したり、モデルを操作するといった作業は、「ルーチン」に慣れることを必要とする。他方、「フロンティアを開拓すること」は、反例を考えたりするような「ノン・ルーチン」な事態を想定し、それに対処する力を必要とする。つまり同じ「数学」という対象を取り上げても、そのレベルには高低があり、その能力には深淺があるということになる。このことは先にふれたように、理性と知性には人間の認識能力として差異があることに対応している。この違いは想像以上だと筆者は感じる。そして、この差異を理解するうえで重要なのが、「ルーチン」か「ノン・ルーチン」か、いずれのケースを処理できるかという視点である。

この区別は、産業社会のほとんどの仕事に必要とされる技能や知識が二様に区別できることと関係する。ひとつは概念化された「一般的な知識」であり、科学的、理論的知識がその主要部分をなす。これは近代科学を発展させた基本的な力であった。もうひとつは「特殊な知識」とも呼ばれるもので、その場、そのときの特殊な状況に関する知識であり、言語で記述したり、概念化することの難しい「個別的」な性質をもっている。この区別はたんに思弁的な関心にとどまるものではなく、産業技術のなかにも実はこの二種類の知識が観察されるのである。

たとえば、生産工程で大型の装置を使う石油化学工業などの現場で働く、経験豊かなオペレーターは、学校で学んだ原理論の理解と、仕事を通して身につけた知識・技能の双方を持っている。そして時には自分たちの作業の詳細について明確な知識を持たずに、熟練を要する仕事を遂行していることがある。明確な知識を持たないのは、表現力が欠如しているからではない。そもそも明確に表現できない性質の知識があるからである。それは物理学や化学などの概念化された知識を基礎とする場合もあるが、必ずしもそれと直接結びつけられた形では把握されることのない知識である。

……ひと口で言えば、ノン・ルーチンに対処するための知識こそ「理性」ではなく、「知性」の働きによって獲得されるものであり、ノン・ルーチンの仕事こそ「知性」の働きによって成し遂げられるということである。

定型的な、記号化されうるような、あるいはマニュアル化された知識をベースとした比

較や推理（三段論法的推論）、あるいは論証は、知性だけではなく理性の仕事なのである。知性は、そうした定型的な知識をベースとしながらも、その隙間を埋めたり、あるいは飛躍的な発想を試みたり、伝統的知識を「特殊ケース」にしてしまうような一般化・普遍化の働きを担っている。変化が生じた時、従来の知識だけでは十分に対応ができないことが多い。それに対して、伝統や経験によって、あるいは定型的な知識をベースとしながら、「変化への対応」を図る力が知性なのである。したがって、知性の働きにとって、一定の伝統的知識は重要な前提となるが、知性は伝統的知識そのものではない。

これまで述べてきたことを要約すると、次のようになる。知性は、深く読み取る力を意味し、理性とは区別されるべきものである。知性はまた、単純に記号化されたり定義されたりできないような知識と深く結びついている。しかし知性の働きを活潑化するためには、理性、一定の経験、伝統的知識を前提としなければならない。知性は無から生まれるわけではなく、一定の「形」と材料を必要としているのである。

このような知性のとらえ方をベースとしながら、近年の知識人（インテリゲンチア）や教育の問題を見ていくと、いくつかの古くて新しい論点が浮かび上がってくる。ひとつは教養とは何かという問題、もうひとつは古典の役割という問題である。

教養がいったい何を意味するかを定義づけることは難しい。しかしそれが、現代では正負両方のイメージを持つようになったことは確かである。正のイメージとしては、古典に関して持つべき知識をベースにししながら、良識に満ちた判断を下す力という。負のイメージとしては、役に立たない古典に関する知識に拘束されながら、常識の域を出ない凡庸さをいう。実はこの正負両方のイメージは紙一重である。しかし前者の正のイメージは、レトリックの持つ知的な側面と強い関係を持っている。

あらゆる議論には、論理的(数理的)な側面と、「立派に思慮し言論をなす」というレトリックの側面が含まれている。前者は現代の大学などの教育で力を注ぐ分野であるが、後者は現代の教育のカリキュラムのなかではほとんど軽視されている。実は教育についてのこの二つの姿勢は、古代ギリシャの二つの学校の対立にすでに現れている。ひとつは、イソクラテスがアテナイに設けた弁論・修辞学校、もうひとつは数年後に同じアテナイの郊外に創設されたプラトンのアカデメイアである。この二つの学校は強力なライバル関係にあっ

た。プラトンの学校は数理的・哲学的学問（幾何学・天文学・音楽理論など）を重点に置くのに対し、イソクラテスは言葉（ロゴス）の錬磨こそが、人間を最も人間らしくする道であると考えていた。

イソクラテスはプラトンを批判して「無益な事柄について厳密な知識（エピステーメー）を持つよりも、有益な事柄についてあり得べき健全な判断（ドクサ）を持つほうがはるかによい」と言っている。それに対してプラトンは、イソクラテスたちは「ケンカ好きで、いつも世間の人間たちのことばかり論じるという、およそピロソピアには最もふさわしからぬことをしている」と反撃した。

イソクラテスが、「実践知として、つねに個人の生の現場から国政の場に至る広い領域での現実的な判断を提供できるもの」を重視していたことは、先に述べた「古典をベースにした良識に満ちた判断」という、教養の正のイメージと完全に重なるものであろう。教養がそうした実践知として生かされないかぎり、たんなる「過去の知性の抜け殻」をありがたがるにすぎないということになるからである。

それでは、その「教養」を論ずる時、なぜ古典が登場するのか。ひと口で表現すると、「いかなる思考にも形がある」からである。形のないものはたんなるカオスにすぎない。カオスから概念を切り取り、さまざまな概念間の関係を表現する。しかしそれだけですべてを体系立って理解できない時、初めて新しい概念を生み出す必要が生じる。では、その形がなぜ古典でなければならないのか、筆者は次のように考えている。

古典は文字どおり、時間のテストを経たからこそ現代まで生き残った。それでは、いかなる著作が古典として生き残るのか。簡単にいうと、いつの時代、どこの国どの民族にも鋭く訴えかける古くて新しい「人間の真実」が記されているからであろう。そこには蓄積された人智がつまっている。一度読んだだけでは理解できないだけでなく、「謎」としか考えられないような不可解なことが記されていることもある。古典は何度も読め、といわれる。最初に読んだ時にはわからなかったことが、あるとき偶然に理解できるような場合もある。一度読んで、その場で理解できるような平明さが大事な分野もある。しかし、重要なことを紙に平明に記したところで、その中心部分が十分伝わらない種類の問題もある。あるいは、重要な事柄自体が、読み手の理解力の度合いによって異なることもある。その

場合、読み手がそれぞれの理解度に応じて、古典という「形」をもった伝統的知恵のなかから、あるいはその知恵を手がかりとして、自分で自分を、そして外的世界を「深読み」することが必要となる。

「古典を暗記せよ」といわれた時代もある。現代では無意味暗記や棒暗記は「反知性的」と考えられている。暗誦は想像力の敵とみなされるからだ。しかし、無意味暗記が知性の働きを準備するという側面があることを見落としてはならない。暗記して頭にたたき込まれた「形」があって初めて「行間を読む」という知性の活動が可能になるからだ。それはルーチンな仕事ができる初めて、ノン・ルーチンな仕事をこなすという関係と類比的なものかもしれない。その点で、「古典」を失った社会にとって、知性は衰弱の危険にさらされているともいえる。「形」を拡大したり、変形したりするためには、まず「形」そのものがなければならないからである。

古典があまり読まれなくなった。このことが知性の働きの前提としての「形」の喪失であるとすれば、現代社会が知性の枯渇に苦しむことはゆえなきことではない。厳密な知識や、何事も論証しなければ気がすまないといった精神に、今の社会は満ち溢れている。息苦しいほど理性的で論理的なのである。しかし、理性的で論理的であることは、人間のなかに隠された野生（野蛮）をコントロールするために重要不可欠ではあっても、それ自体は新しい問題を見つけ解決する力とはなりえない。むしろ理性的・論理的すぎるということは、時として野蛮を生み出す危険をはらんでいることでさえあるのだ。

ルーチンだけをたたき込まれると人間は保守的になる。そしてルーチンから逸脱するものに対しては何かにつけ反撥を繰り返す。したがってルーチンだけしか学びとらない頭脳は、変化に対して鈍感になるだけでなく、変化にどう対処すべきかを考える力を持ち合わせえない。

出典：猪木武徳『自由と秩序—競争社会の二つの顔』（中央公論新社，2001年）

\*なお、本文は、問題文として適切な体裁となるよう必要な修正を施している。

## 【問Ⅰ】

〔文章Ⅰ〕および〔文章Ⅱ〕において述べられている「知性(intellectus)」の意義とは何か。文章中における「理性(ratio)」との比較において論じなさい(800字)。

## 【問Ⅱ】

〔文章Ⅰ〕および〔文章Ⅱ〕の記述を踏まえ、「古典」が果たす役割について、具体例を挙げながら自由に論じなさい(1,200字)。

